

寄書

水彩畫に志した動機

M O

幾年前であつたか自分が刀根河畔に居つた時、花見に上京して西洋畫の展覽會を見物した、それが西洋畫の趣味を深からしめた。基て當時は水彩畫といふとを知らずに油繪を水繪具で畫いた繪と思つて歸てから廿五錢の繪具箱をいぢり初めて、利根の鐵橋や菜花の上行く白帆、布施辨天の遠望などを畫いたのが今思へば水繪の描き初めてあつた、自分は展覽會で見た吉田博氏の「千山萬水」といふ千曲川の上流かを畫いた油繪

不折氏の「淡烟」審也氏の「海岸」芳柳氏の「楠公」誰なりしかの「宮杉」「蔓橋」などの水彩畫を回想しつゝスケツチをして居た、其内に磯濱へ移つた、時に丁度新聲社から水彩畫の架が出版されたので早速買ひ求めて讀んだ。

コバルト、カーマイン、レモンエルロー等の色名やブラツシユの形、筆洗等のあることを知つたのはこの時である、直に見取枠や畫囊を拵へて挿繪「早稲田の秋」の筆使

ひに眞似てスケツチを初めた、一度冷へかゝつた畫熱が再發した、そして今日まで引續いて居る、只『水繪』の發刊と春鳥會々則を知つた時は少しく興奮した。僕の畫熱は慢性である冷める事はないが進歩の痕が見え無い爲めに其度が高まりもしない、併し今回入會して諸先生の懇切なる指導を受けたら或は少々の發展を認める事が出来るたらうと樂みにして待つて居る。

水彩畫を學びし爲めの利益。

先づ第一に異郷の山水の有様をスケツチして歸宅の後時々折々眺めてはスケツチ當時の光景を忍ぶ愉快が第一である。昨夏滿洲へ旅行した時の奉天城外の喇叭塔、老虎灘の廟宇、朝鮮沿岸の島嶼の遠望等はブツクを開けば忽ち其時を回想して愉快である比叡山上より琵琶湖のスケツチ、高野の驛の夕月夜に高野の靈山を望んだスケツチ等に於ても同様である。

第二に見た事を畫に表さずとも畫心がある。と建築や山川の配置や、を記憶する力が強くなると思ふ。

第三自分の職務の教授にあつての興味多

くを加へて兒童に談すことが出来る。

第四自分は今往復三里羽の道程を通勤して居るが水彩畫を初めてからは毎日／＼路の兩方の麥畑や松林や、夕陽や朝靄やが異なる自然の美を示すに見とれて、明日の變化を豫想したり彼の松林の前の菜花が咲いたら如何ならんなど畫題を撰び／＼歩むから多くは歩行の苦みを知らないて居る。友人などは六年間も能く根強く通勤するといふが御當人の僕は前述べた通りである。

畫に對する私見

R、N、生

繪畫に東西洋の區別あれども、其原則は二ならず、畫家が自然美若しくは人工美に對する審美的情緒を活躍表現して觀者の美感に訴ふ者ならば、其手段と方法との上に於て或は寫實的なるか抽象的なるかの相違のみ、然しながら東洋畫に於ては骨法用筆に全幅の精神を傾到し單に輪廓を規定するに過ぎざる線條に多大の價値を偶し線條其物をして神秘を發揮するの媒となし縁となし輕觸揮省略したる寸分の線條に鬱勃たる元

氣を映出し風尙と餘韻とを第一義とし物象其物は末技として觀者の思索に放任し霸氣横溢して其要領を穿たざるに到ては憾なきを得ず個人の嗜味のために描ける繪畫としても如此は頗る藝術に對して不親切なりと云はざる可からず元來吾人は知識の深淺經驗の多少等に由り感情に相違ある者なれば畫題を確實に捉へ物象を精確に寫すにあらざれば彼の虎を描いて狗に類するの誹りを不免往々文人畫に對する滑稽の沙汰は聞く處なり是れ或は淺薄なる少壯畫家の一弊ならんも概して東洋畫に於ては科學的確實性を無視し天才に放縱して不知不識不自然に蹈り後は漸く糟粕に慣れて其妙味を等閑にして遂に一彩を傳し得ざるを見れば頗る落漠の感なしとせず之に反して西洋畫の科學的確實を具備し頗る堅實とを併せ有するものと比較せば均しく繪畫にして彼と是とは琴を操て齊間に立つが如し元來繪畫は情の投影なれば慢りに主觀的空想を恣にするべきに非ず客觀的確實性の印象なれば情意の相對的經驗と不離の關係を有するものとして社會の文化と吾人の性情とを纏綿として發

展する者なれば宗教的眞理の外廓を周匝せんものと云ふも敢て過言にあらざる可きか古來より宗教と繪畫相依り相扶けて進歩發達したるを見れば蓋し思ひ半に過ぎざるなり所謂繪畫は小乗教により何人にも入り易き發心門にして劣機下根の凡夫も一度機縁の純熟に會しては則ち光耀海中の人となるにあらずや余嘗て聞く繪畫を學ぶの最大要件は複雑豊富なる學識や經驗にあらずして赤子天真の心情にありと云ふ然るが故に名畫には畫家の高尚なる精神渾然として具象的意義を現はし無限の興味を興ふるものなり誰か斯の手に描かれたる落日の壯觀を見て崇高の心昂らざる寒林の靜寂に歸依の思ひ湧かざる畫家の感得せる感情は觀者をして又宇宙の實相に觸れしめたるが如き感興を催さしむ繪畫の權威は譬へ絶體を攫むの器にあらずとするも吾人これを光耀の天に入らしむるの道案内者ならんか且つ夫れ美感なるものは快不快の範疇に依て事物の美醜を判断し光明の方面に人生を誘導するものなれば濁浪迷霧の裡に人生の價値の埋没せらるゝを憂ひ道念の進境を促し美は無上

の精進を希ふよりして人生の高調の詩趣と道念とを合せ撮めて最深實在に旋泳せしむるものと云ふべきか。

青葉集

言 線 生

△寫生は朱敗した。日は暮れた。頭の上で晚烏がバカダ〜と啼く。

△繪具がのらぬ。調子が合はぬ。塗る洗ふ益々面白からず、奮發一番勇氣を鼓舞して夢中で畫き終つて見れば捨て難い。

△初學者が初めて郊外寫生をするのは甚だ難い事である、師曰く『然り臨本に依るべし、臨本と同じ様な景色を見出して其れを畫けよ』と。

夏のスケッチ

北多摩 島田 晚 韻

青梅町の向ふの二股尾は、海禪寺の前に一寸した面白ろい大きな柿の樹と家根がある、駕を枉げて畑道を下りて行つた、遠景は多摩川を隔て、吉野村の丘陵遠く西より東に走つてゐる、中景がその柿の樹に家根、前景が豆と玉黍の畑になつてゐる、全體が